トヨタ財団　しらべる助成

調査まとめ
―片品村の既存農家の現況に関する調査―

NPO 法人武尊根 BASE

目次

はじめに ..... - 2 -

第１章　片品村既存農家の現況に関する基礎データ ..... - 3 -

１－1.　群馬県総人口内の農業就業者数の推移 ..... - 3 -

１－2.　近隣地域と片品村総人口内の農業就業者数の比較 ..... - 5 -

１－3.　片品村内の既存農家の状況と課題 ..... - 10 -

第２章　農業を支える人々の思い ..... - 16 -

おわりに ..... - 19 -

謝辞 ..... - 20 -

参考資料 ..... - 21 -

はじめに

2018年8月より開始した聞き取り調査について、対象農家からヒアリングした情報をもとに、ここへ調査記録を報告する。

高齢化や若者の農業離れにより、片品村の産業の柱の一つとも言える農業は衰退の一途を辿る。現在も農業へ従事する人の減少傾向に歯止めはかかっていない。日本全国一部のエリアでは生業としての農業が再注目され、若者の農家数が増えている地域も見られる昨今、ここ片品村ではなかなかその余波は見られない。既存農家からは、村の農業を支える人材の不足を憂慮する声が聞かれる。雪下栽培の野菜や雪を利用した野菜の貯蓄方法など、地域特有の農業技術が受け継がれている中、これらを伝承する人材がいないということは大変もったいないことである。

現在、村の農業を支える人々がどのような人なのか、どんな思いで農業に取り組まれているのかを改めて調査した。片品村の農業の魅力を再発信すること、地域内外の若い世代へその魅力を伝え興味関心を持ってもらい新たな担い手となってくれることを願い、本調査報告書をまとめる。

本調査は、以下の 3 点を目的に実施した。第一に、当該地域片品村の農業を支える人々を取り巻く状況とそれらの人々が考える農業のあり方について明らかにすること。第2に、村の魅力的な農家の存在を明らかにし、就農を目指す地域内外の若者へ情報発信すること。最後に既存農家から就農を目指す若者へ、現在まで培われてきた地域の伝統的な農業技術を継承することを目的としている。

この報告書が、現在、私たちが日々口にする「食べ物」を生産する農家がどのような思いの下、農業に取り組んでいるか生の声を明らかにし、地域内外の人へその思いを伝える一助となることを願う。また、本報告書を目にした若い世代が農業への興味関心を高め、生業としての農業が将来の選択肢となるような事例が一つでも生まれること、そしてそれらの若い世代を支える環境整備を、NPO法人武尊根BASEが先導して実施していくシステムづくりの第一歩となると嬉しい。

第 1 章では、片品村の既存農家、調査対象とした農家の現況を比較しまとめるため、群馬県内、近隣地域の農業を取り巻く現状について考察を行った。その上で本調査の対象となった農家の現状についてデータをまとめた。

第 2 章では、データ、数値だけでない、農家の声、思いを当該地域内外の人へ知ってもらいたく、プライバシーに配慮しながら本調査対象者となった農家の意見や考える課題についてまとめた。

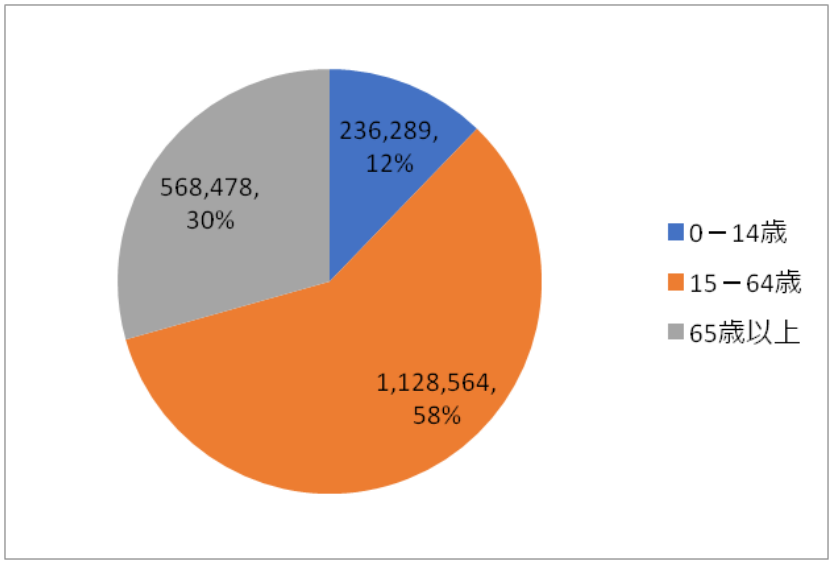
最後に、本調査のまとめと今後の課題と展望について、またこの調査へご協力して下さった片品村内の農家のみなさんへの感謝を述べて結びとする。

第１章　片品村既存農家の現況に関する基礎データ

1－1. 群馬県総人口内の農業就業者数の推移

本調査の実施地である片品村のデータとの比較のため、まず群馬県内の総人口に対する農業就業者数の推移について数値を見る。

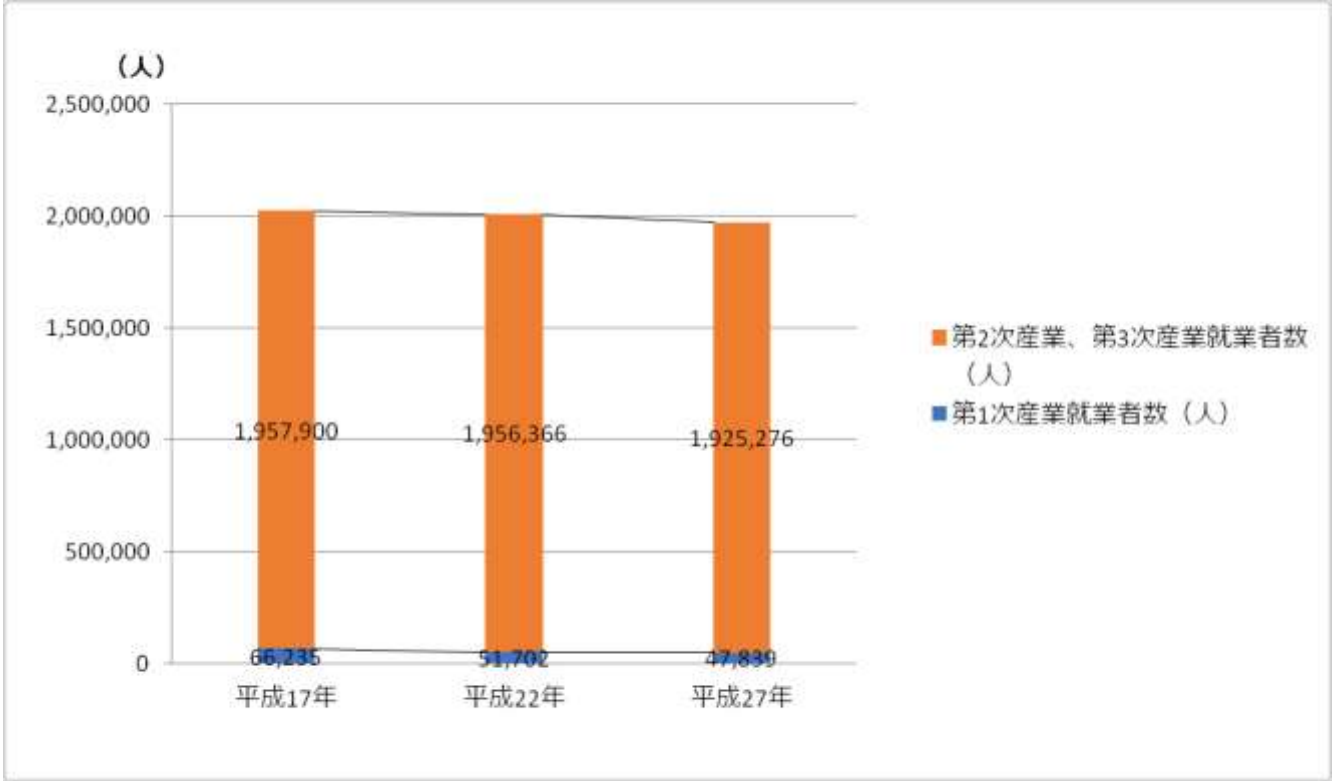
下の図 1 は平成 30 年年齢別人口統計調査結果をもとに、2018 年 10 月 1 日現在の群馬県の年齢別人口構成比を表す。総人口 1,933,331 人のうち、0－14 歳にあたる年少人口の構成比は全体の約 12%、続いて 15－64 歳の生産年齢人口の構成比は約 58%、65 歳以上の老年人口の構成比は約 30%となっている。さらに細かな年齢区分で見たとき、65－69 歳の人口構成比が全体の 7.8%と最も高くなっているのだが、これは昭和 22～24 年に出生した第 1 次ベビーブーム世代の割合が多いためである。15 歳以上から 64 歳までの生産年齢人口と 65 歳以上からの老年人口を合わせ、その中から就業している人を抽出して産業別の就業者数をまとめたデータがある。



［図 1：群馬県年齢別人口構成比　（平成 30 年年齢別人口統計調査結果より筆者作成）］

平成 27 年度国勢調査就業状態等基本集計結果の数値を見てみる。平成 22 年から平成 27 年の 5 年間の推移をまとめているが、15 歳以上の就業者数の総数が平成 22 年の 965,403 人から平成 27 人は 966,060 人と増加しているのに対し、第 1 次産業である農業・林業分野に従事する人口は、平成 22 年の 51,702 人から平成 27 年には 47,839 人に、たった 5 年間で 8%の減少が見られた。その他製造業が主となる第 2 次産業や、サービス業主体の第 3 次産業の就業者数は増加傾向にある中で、農業、林業の就業者数は著しく右肩下がりとな

っている。加えて、農業従事者の約 60%が 65 歳以上の就業者という数値だ。群馬県全体で見ても、農業における就業者の減少と高齢化という現象を食い止めることは大きな課題である。



［図 2：総人口と第 1 次産業就業者数の推移　（平成 17,22,27 年国勢調査より筆者作）］

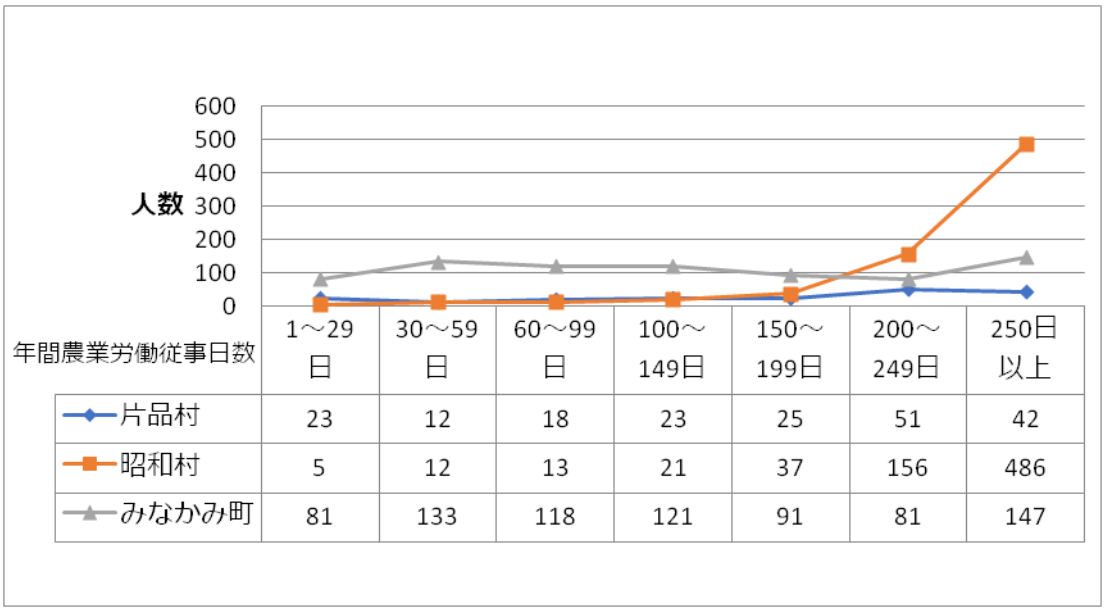
1－2. 近隣地域と片品村総人口内の農業就業者数の比較

県内を見渡しても、農業就業者数が下降傾向であること、そして高齢化が進んでいることが分かった。続いて、本調査の実施地となった片品村の状況を見ていく。その際、隣接する昭和村、みなかみ町との比較を行いながら現状を考察したい。昭和村とみなかみ町の 2 町村を比較対象として選んだ理由は、片品村の産業構造に由来する。片品村は、冬のスキー、観光業と夏の高原野菜生産、農業の二本柱の産業によって主たる経済活動が営まれている。観光業と農業に着目し、近隣地域の一大アウトドアレジャー観光地であるみなかみ町と一大農業地帯である昭和村の 2 つの町と村の、柱となる産業に従事する人口構成に注目したいと考える。

	総人口（人）	第 1 次産業就業者数	第 2 次産業就業者数	第 3 次産業就業者数
片品村	3,950	526（21.1%）	454（18.2%）	1,514（60.7%）
昭和村	7,229	1,936（45.6%）	685（16.2%）	1,620（38.2%）
みなかみ町	19,570	1,036（10.4%）	2,064（20.7%）	6,876（68.9%）

［表 1：3 町村の 2015 年度総人口と就業者数・割合の比較　（筆者作成）］

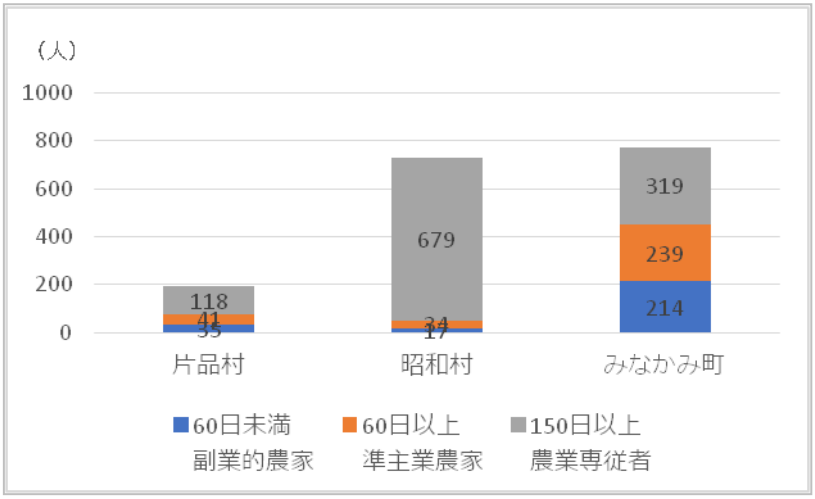
表 1 は、片品村、昭和村、みなかみ町の 2015 年度の総人口数と第 1 次産業から第 3 次産業までの就業者数とその割合を表している。まず昭和村から見てみると、一大農業地帯であることは明白で､他 2 町村と比べても第 1 次産業に従事している人口の割合が最も高い。次にみなかみ町を見ると、やはり観光業含む第 3 次産業への従事者の割合が圧倒的に高いことが見てとれる。片品村も第 3 次産業へ従事する人口の割合が比較的高く 60.7%、続いて第 1 次産業への従事者の割合が 21.1%という結果となっている。この数値を見比べても、片品村とみなかみ町にとって、観光業（主にスキー産業と宿泊業等）を含む第 3 次産業が経済を支える主たる産業であることがわかる。そしてその基幹産業を支えるもう一つの産業である農業は、時期的な雇用先を創出するという意味でも、地域にとって必要不可欠な産業であることが考えられる。一方で、第 1 次産業である農業への就業者数の割合が最も高かった昭和村は、年間通じて農業で仕事を得られる「組織的」な農業法人、企業が存在することが就業者数の割合を高く保つ要因であろう。安定した雇用があることは、働き手世代にとって安心な生活を確保、イメージしやすくする。



年間農業労働従事日数	1～29日	30～59日	60～99日	100～149日	150～199日	200～249日	250日以上
片品村	23	12	18	23	25	51	42
昭和村	5	12	13	21	37	156	486
みなかみ町	81	133	118	121	91	81	147

［図 3：農業労働状況の比較　（2015 年農林業センサスより筆者作成）］

上の図 3 は、1 年間の中で農業就業者が農業に従事している日数を示している。昭和村のみ右肩上がりで、年間 250 日以上農業に従事している人の割合が最も高く、一年を通じて農業で生計を立てることのできる環境が整備されていることがわかる。片品村も 200 日以上農業へ従事しているという人の数は少なくはないが、やはり 1 年 365 日、農業だけで暮らしを成り立たせていくのは難しい状況なのではないかと伺える数値である。

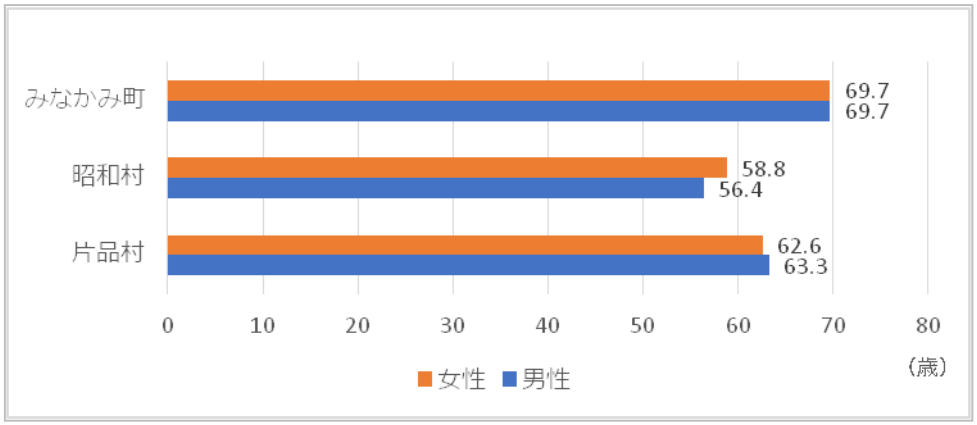


［図 4：農業経営従事状況比較　（2015 年農林業センサスより筆者作成）］

図 4 が示すように、農業所得を柱に生計を立てる農業専従者、また農業所得以外の所得を柱に生計を立てる準主業農家・副業的農家の数を比較すると、昭和村では 93%の農家が農業所得をメインとし農業に従事していることがわかる。一方で、片品村とみなかみ町は、約 40～60%の農家が農業所得以外の所得によって生計を立てている。農業だけで暮らしを立てる農家も存在するだろうが、多くの農家が農業と農業以外の仕事に従事している様子

が見えてくる。環境、産業的にも通年「農業」で暮らしを支えていくことは未だ難しそうである。農業の労働状況や従事者数の現状を比べてみるだけでも、各地域で「農業」を生業として暮らしていくことが可能かの一部を垣間見ることができる。

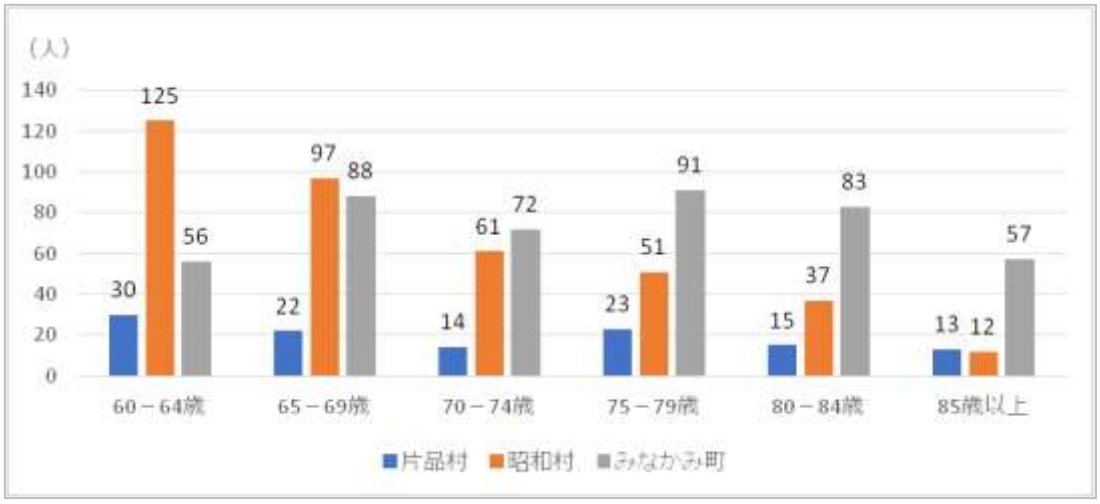
一方、農業従事者数の平均年齢を比較しても、昭和村だけ 60 代を切っている。図 5 は 3 町村の男女別、農業従事者数の平均年齢を表している。



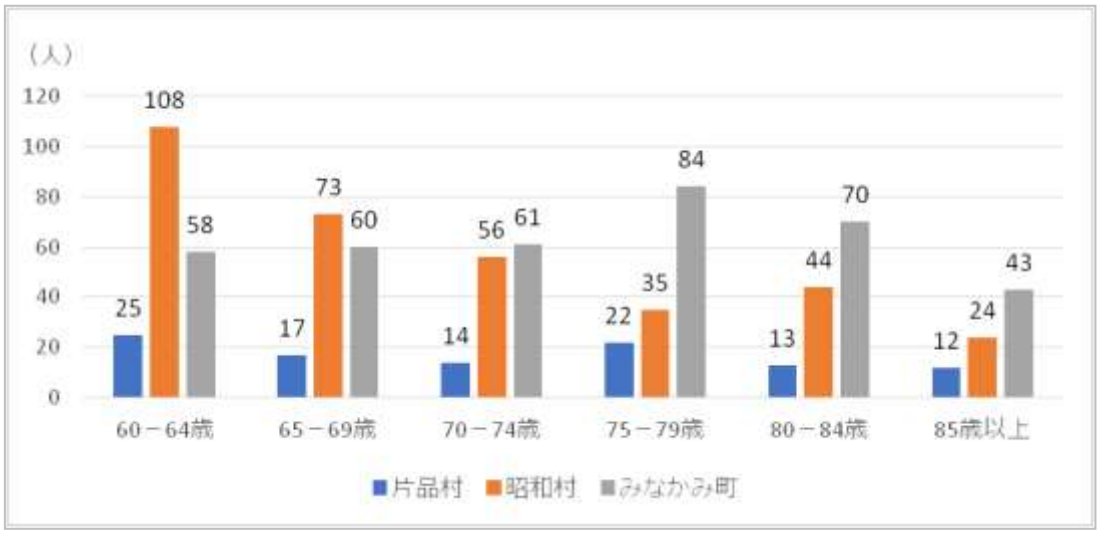
［図 5：農業従事者等の平均年齢比較　（2015 農林業センサスより筆者作成）］

昭和村の農業従事者の平均年齢は 57.6 歳と低く、続いて片品村が 62.9 歳、みなかみ町が 69.7 歳と高くなってゆく。群馬県の農業従事者の約 60%が 65 歳以上というデータと比べると、昭和村、片品村の農業従事者の年齢は低いと言える。

下の図 6、7 を見てほしい。3 町村の 60 歳以上の農業就業者の人口を比較したものだが、60－64 歳の就業者数を筆頭に、昭和村だけ男女と共に、ほぼ右肩下がりで人口数が減少している。この年齢層を境に、現役を引退する人が多いことが予想される。つまり、引退しても次の世代が控えており、経営を譲渡できる余裕があるからではないか。片品村においては、男女の就業者数共にほぼ同一であることが特徴的で、これは家族経営的農業が主流であることが理由とされるのではと考えられる。

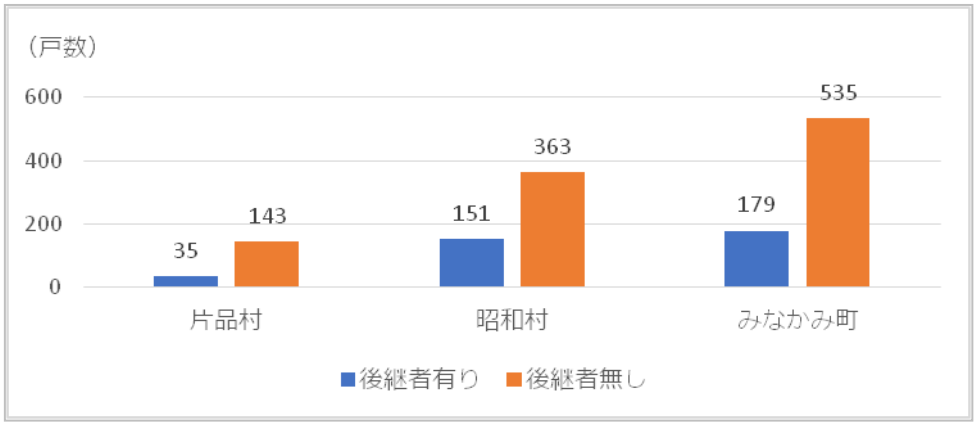


［図 6：60 歳以上農業就業人口数比較（男性）　（2015 農林業センサスより筆者作成）］



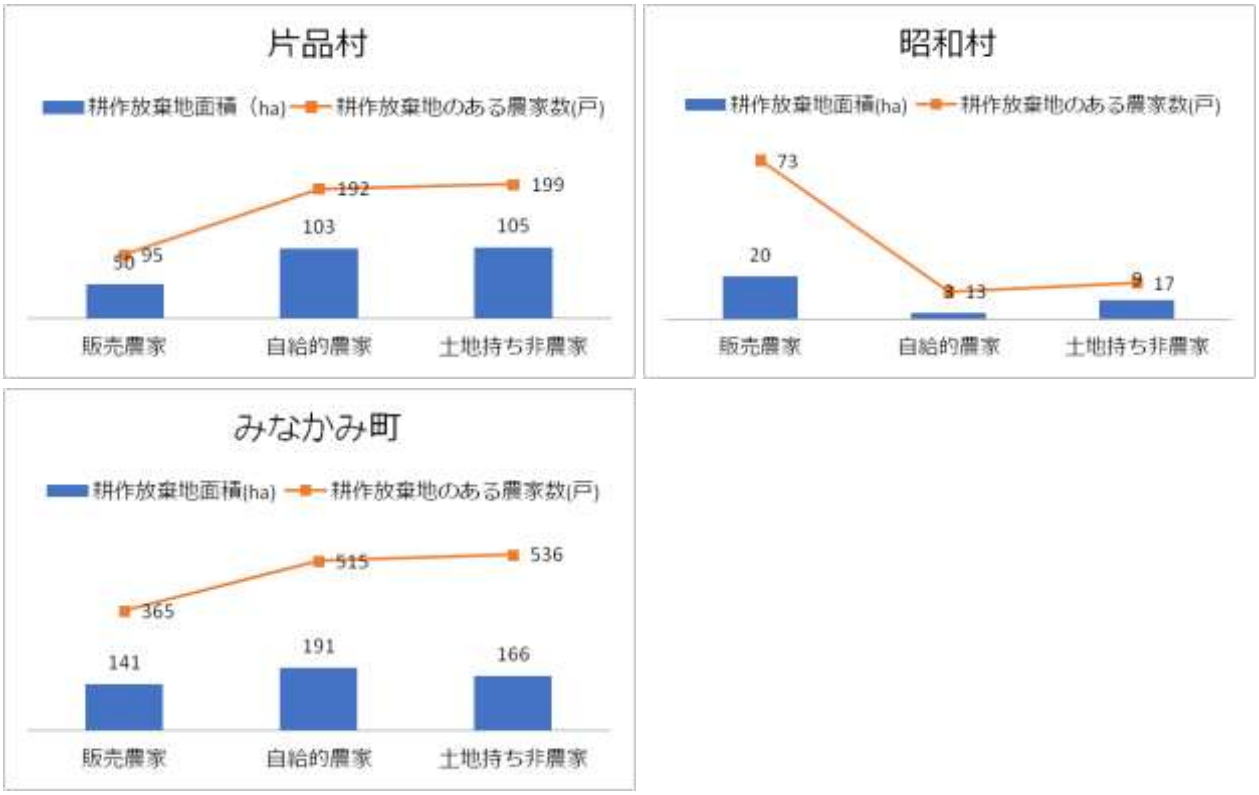
［図 7：60 歳以上農業就業人口数比較（女性）　（2015 農林業センサスより筆者作成）］

各 3 町村の農業従事者の平均年齢を比較した。その上で農業経営している世帯に後継者が存在するのかという事実を確認する。



［図 8：農業後継者の有無別農家数比較　（2015 農林業センサスより筆者作成）］

農業経営をしている世帯へ、それを継承してくれる後継者が存在するか調査された結果である。3 町村共に、「後継者有り」と答える世帯よりも「後継者無し」と答えた世帯のほうが多くなった。農業従事者の平均年齢が一番低かった昭和村でさえ、後継者確保の問題は大きな課題と言えるだろう。それぞれグラフの形はほとんど同じように見えるが、この 3 町村の中で「後継者無し」と回答した世帯が一番多かったのが片品村である。後継者のいない世帯の割合がそれぞれ、片品村約 80%、昭和村約 70%、みなかみ町約 75%となっている。この後継者不足の問題は、昨今始まったものではない。これは群馬県内の第 1 次産業就業者数の減少傾向とも深く関係するだろう。後継者がなかなか確保できない、この状況では、就業者数の減少に加え、農地の荒廃という問題にも直面せざるを得ない。後継者を得られず、農業経営が立ち行かなくなった耕作放棄地の増加も全国的な大きな問題であり、例外なく当該地域においてもその問題は露見される。



［図 9：耕作放棄地のある農家数と耕作放棄地面積　（2015 農林業センサスより筆者作成）］

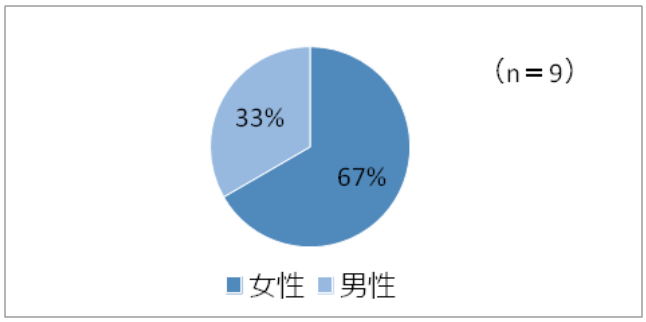
図 9 は、耕作放棄地があると回答した農家の世帯数とその耕作放棄地面積を表す。3 町村共に、耕作放棄地があると答えた農家世帯はあるものの、販売農家と自給的農家の世帯数とそれらが持つ耕作放棄地面積を比較したとき、片品村の農家世帯 1 戸あたりが所有する耕作放棄地面積が最も広くなり、0.53ha という数値が出てくる。昭和村の農家世帯 1 戸あたりは 0.26ha、みなかみ町では 0.37ha となる。近隣地域と比べても、片品村の農家世帯が所有する耕作放棄地の面積が広いことがわかる。加えて、先に見たように後継者無しと回答した農家数も片品村では顕著だったことを鑑みると、このままでは今後さらに耕作放棄地が増加することが容易に想像できる。

農業就業者について、人口、労働環境、耕作放棄地等の観点から 3 町村で比較し現状を見てきた。高齢化や人口減少に伴い農業の就業者数が減少に転じていることは明らかであった。しかし、それによって農業の衰退を傍観するだけではなく、年間雇用可能な環境を整備したり、ビジネス感覚に特化した農業を展開する等、地域が一体となり産業を育てていくことも可能であることも近隣地域の様子から伺えた。悲観的になるだけでなく、産業を盛りたてる取組みを従事者、行政、各関係者と共に思索し実践していく可能性は十分に広がっている。

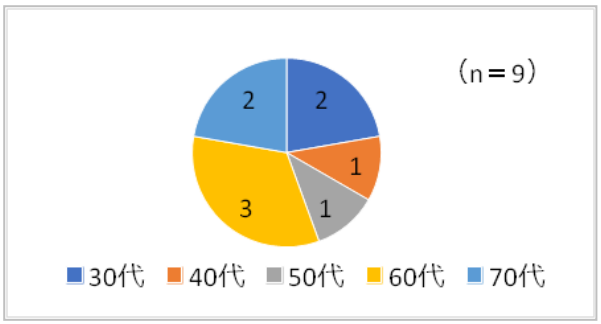
1－3. 片品村内の既存農家の状況と課題

群馬県内、そして片品村と近隣地域の農業を取り巻く状況を、おおまかに見てきた。この項では、今回実施した調査で片品村内の農家から伺った話を元に、より身近に起こっていることや現状についてまとめる。

本調査で対象とした、片品村の既存農家の基礎情報をまとめる。30～70 代までの男女 9 名の既存農家に聞き取り調査を実施した。男女比は下の図 10 を参照頂きたい。



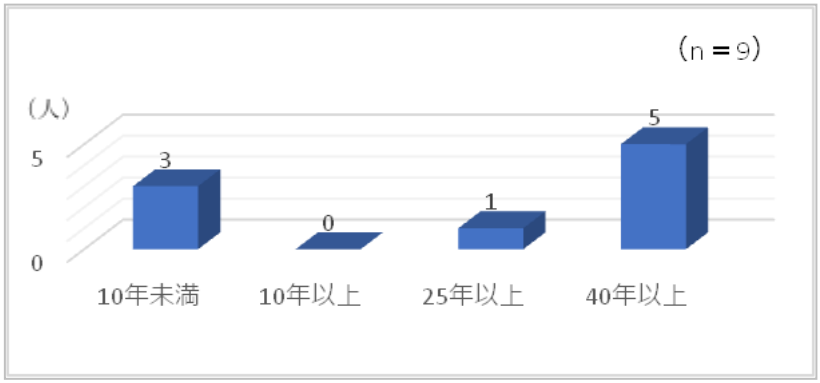
［図 10：調査対象者男女比　（筆者作成）］



［図 11：調査対象者年齢層　（筆者作成）］

片品村の農業従事者の約 54%が男性という中で、今回聞き取りを行った農家の約 7 割が女性となった。家族と一緒に協力・計画しながら農作業に取り組む農家、女性一人で農作業をし続けている農家など、様々な環境で農業に取り組む人々から話を聞くことができた。

調査の対象者となった農家の年齢区分を図 11 が表す。30 代、40 代を合わせて約 3 割、60 代以上の農家が半分以上となった。また、9 名の農家それぞれに農家歴を伺ったが、半分以上の農家が農家歴 40 年以上という大ベテランの方々であった。10 年未満の農家の全てが、都市に出て仕事をしていた U ターン者か周辺地域で別の仕事に就いていた経験があり、異業種から農家に転身された人であった。

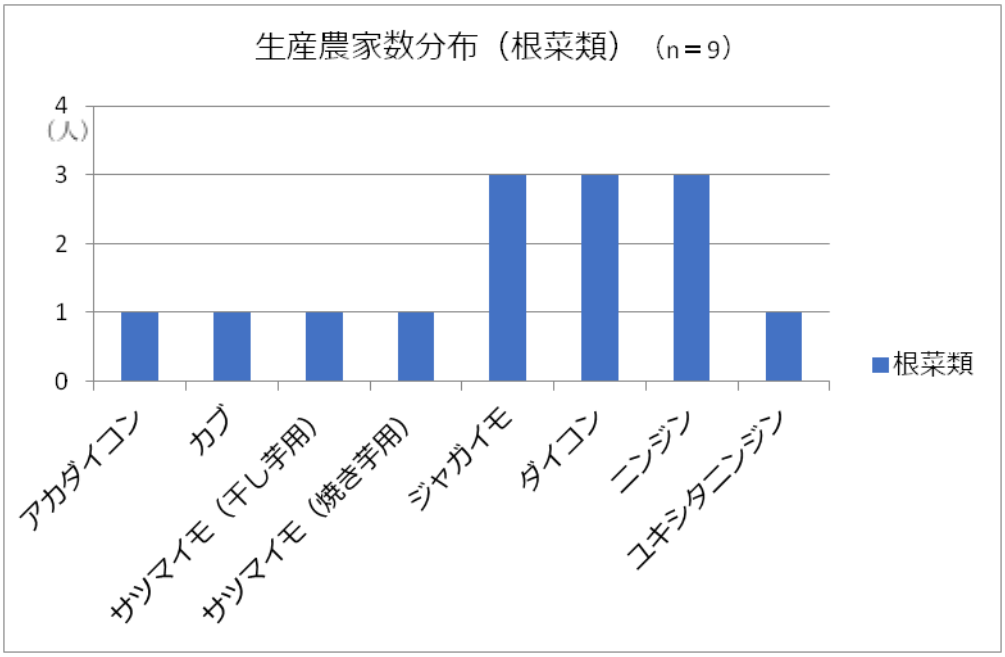


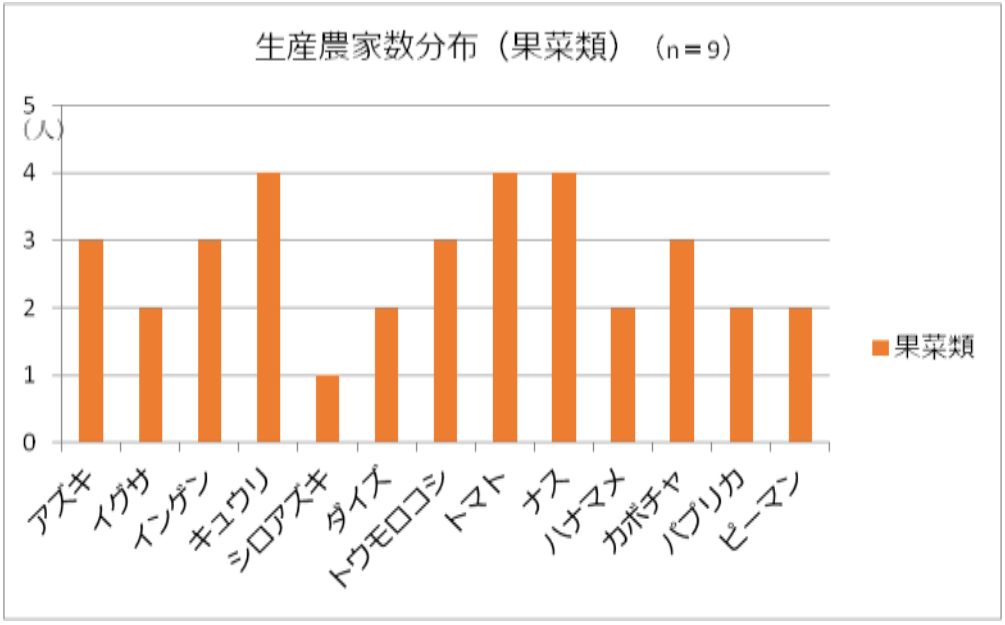
［図 12：調査対象者農家歴（年数）　（筆者作成）］

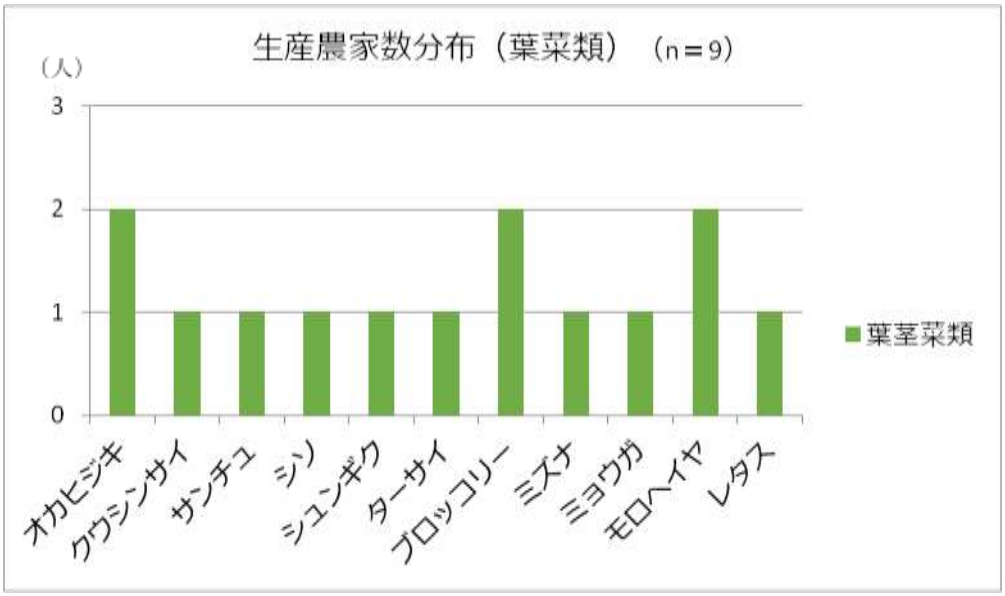
片品村は夏の高原野菜が一部ブランド化されている地域である。近年の代表的な作物はトマトやトウモロコシで、高原特有の寒暖差のある気候が作物の糖度を高くする。甘みの強い作物が美味しいと評価される昨今の風潮に合った作物を生産することができる土地だ。

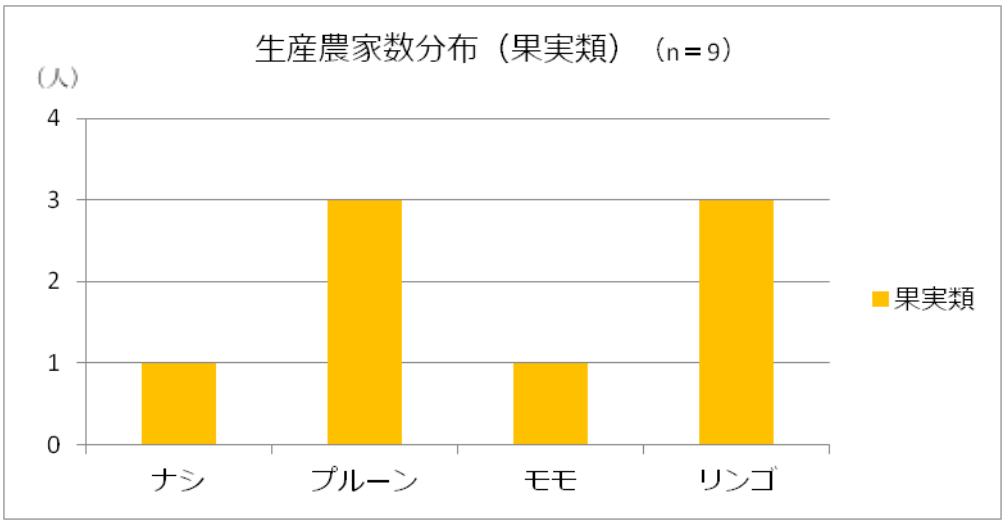
この調査で話を伺った農家の多くもトマトやトウモロコシ、ダイコンの生産をされているが、驚くべきはその生産作物の多さであった。今回話を伺った 9 名の農家がそれぞれ生産されている作物を根菜類、果菜類、葉菜類（※1）、果実類に分けたものが、下の 4 つの図となる。

（※1）根菜類、果菜類、葉菜類の分類は、Food Action Nippon の分類方法を参照した。
根菜類：根っこや地下茎の部分を食べる、果菜類：果実や種の部分を食べる、
葉菜類：主に葉っぱや茎の部分を食べる









［図 13：根菜類、果菜類、葉菜類、果実類別生産農家数分布　（筆者作成）］

縦軸の数値は、その作物を生産されている農家数となる。農家の特定が出来てしまう生産品目については、プライバシーに配慮し明記を控えた。上の作物だけで 35 以上となるのだが、ここには書ききれない程の作物、花卉類を調査対象の農家は作られていた。印象的だったのは、大きな規模で生産をされている農家であっても、現状に満足せず広い視野で農業に取り組まれているということだった。下記、印象的だった視点を箇条書きにする。

［インタビュー調査より抜粋（調査年月日：　2018 年 8 月 30 日～11 月 7 日）］

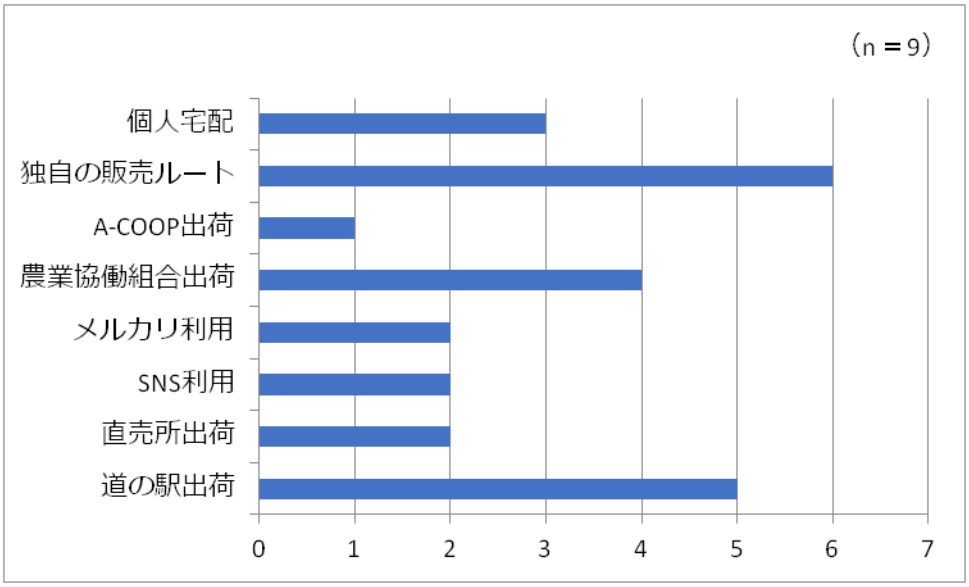
- 将来の気候変動を見越し、生産できる可能性のある作物の栽培を試みる。
- 環境問題に配慮し、自然に優しい農業の実践、学びを続ける。
- 現状のブランド化しつつある高原野菜に甘んじず、常に市場が求めるものは何か、積極的に自分の目、手、足で確かめる。

・新しく改良された作物を積極的に取り入れると同時に、地のもの（固有種）も絶やさないよう守る。

片品村の全農家の視点、考え方ではないだろう。しかし、今回の調査で対象となった農家の多くが、環境、雇用、人的資源等について強い危機感を持ち、今出来ることを、将来のためにできることを実践しようと奮闘なさっている方々だった。

［図 14：調査対象者の所有する耕作面積　（筆者作成）］

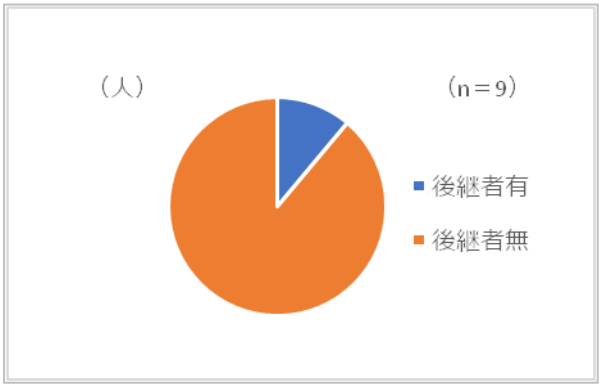
今回話を伺った農家は耕作放棄地を持っていない農家であった。上の図 14 は、9 名の農家が所有し、作物を耕作している土地面積の広さをまとめたものである。20,000 ㎡（2ha）の土地で作物を生産していると大農家という区分に入ってくる。本調査では、大農家の区分とされる 20,000 ㎡の半分、約 10,000 ㎡（1ha）の規模で農業経営をされている農家が 1 名いた。果樹栽培も含め、その他 8 名の農家が 1ha 以下の耕地面積で農業を営まれている。農業に携わっていないと、なかなかヘクタール（ha）といった単位がどれくらいの広さかイメージできない。簡単にイメージして頂けるよう、身近な例をあげる。例えば、1ha はサッカーコートの 1.4 面分に値する。テニスコートで表すと約 38 面分となるそうだ。広さ、大きさをイメージできるものに置き換えると、いかに、10,000 ㎡（1ha）、1,000 ㎡の土地で農業を営むことが大変なことかおわかり頂けるかと思う。そして、その広さを場合によっては一人でマネジメントすることもあるのだ。今回の調査で話を伺った農家の中には、高齢となっても完全に一人で農地を管理されているという方がいた。しかし、多くの農家が夫婦や家族、繁忙期の期間だけ人を雇われているようだった。



［図 15：調査対象者の農産物の販売方法　（筆者作成）］

調査対象者のおよそ半分の農家が、販売方法に関して農業協同組合への出荷をメインにしていると答えた。しかし驚いたのは、農業協同組合の出荷に加え、地域内の道の駅へ出荷したり、独自の販売ルートも築いたり、生産した作物を多様な方法で販売しているということだった。農家の多くが、農業協同組合への出荷に追われ手一杯になる中で、調査対象者の多くはその方法以外の販売の仕方にチャレンジし、エラーを繰り返しながら、一つ以上のやり方を生み出されていた。人によっては、県内外への販売方法として SNS を活用したり、人の繋がりを大切にいかしながら関東圏へその販売網を広げる取組みにも着手されていたりと、バラエティに富んだアイディアを実践されていた。また、こだわりと愛着を持って育てられた作物がどんな消費者に届くか、顔の見えるやり取りを大切にされる人もいた。

従来のやり方に甘んじることなく、将来のこと、片品村全体の農業の発展を憂慮し、実践をされている方ばかりであった今回の調査対象者へ、後継者の有無についても話を聞いた。9 名の対象者のうち、「後継者有り」と答えてくれた農家はたった 1 名であった。



［図 16：調査対象者後継者の有無　（筆者作成）］

家族経営をしていて、跡取り世代もいる農家であっても、後継者として農業を志すには様々なハードルがあるようだ。また、まだ後継者となりうる存在が幼い農家は、一様に今の農業を取り巻く状況を鑑みると、後継者になって欲しいことを押し付けることはしたくないと話してくれた。今の農業を取り巻く状況、片品村の中で大きな課題となるのが、「年間通じて農業に携わることが難しい」ということである。冬季、雪に閉ざされてしまう時期においても、農業的仕事ができるような環境を生み出すことは、今後の若い世代の職業選択の機会の幅を広げる重要なポイントとなることが伺える。前述の「後継者になることを押し付けたくない」と話してくれた農家も、本人の意思で農業を志したい、ということであれば応援し、支えてあげたいとも話を聞かせてくれた。また将来、子どもへの選択肢として農業が素敵な仕事と映るように、今の農業をもっと魅力的なものにするべく取組みをスタートされている農家もいた。

将来、家族ではない若い世代が農業を志し、教えを乞いたいといった場合、その指導、人材を育てることに意欲を示して下さった農家は今回の調査では約 4 割程となった。農業で生活をしていく覚悟がしっかり備わっていること、ある程度自分の目指したい農業のスタイルを固めていること、相性の良いマッチングを仲介する第三者的組織が存在することなどの条件がきちんと揃っていれば、興味があると答えてくれた農家もいた。若い世代を取り込むに当たっても、吟味した上で基盤整備を進めることが第一ステップとなる。

第２章　農業を支える人々の思い

本章では、今回の調査対象者となった 9 名の農家が教えて下さった話の中から、その人の信念や大切にしていること、農業に対する思い、また片品村の農業の未来や課題について語ってくれた内容をまとめる。農業に限らず、数値だけで判断できることは極わずかである。思いを持って農業に取り組む人たちの存在は、もっと広く社会に、世代を超えて、農業に詳しくない人へも届くべきと考える。また、こうした農業を支える人の思いを知ることで、社会や消費者の農業、農産物に対する考え方が多様になれば大変意味のあることだと思う。

これからまとめるそれぞれの話は、農家のプライバシーに配慮し、匿名での表記となる旨を始めに断らせて頂く。

【農家 A、B】

農家への転身の大きなきっかけは、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災であったと話す農家 A、B。何か大きな変化に対峙しなければならなくなったとき、家族を自分の手で守るために自分のペースで仕事をし、食べ物を作ることのできる農業に魅力を感じたと話してくれた。

「既定の量の農薬を作物に散布する作業をしているとものすごく気持ち悪くなる」と話してくれた。現在は自分で「これくらいの量なら・・・」と試しながら、最低限の量で害虫、病気対策を講じられている。新品種の作物を栽培されることにも大変意欲的で、「全部同じ商品が並んでいたら面白くない。人とは違ったことをする、それが面白い。」と笑顔で語ってくれた。ご家族をとても大切にされていて、その思いが農業に直結していることを強く感じた。「家族が安心して食べられるものを作ること、それが他の消費者の食べ物への安心感につながる」という信念を持たれている。

【農家 C】

今回の調査中お話したどの対象者も農家 C のことを「頑張り屋」と評するほど、たくさんの仕事量を淡々とこなされる農家 C。高齢となり身体の無理もなかなか効かなくなっていると話されたが、ご自分が育てられている作物への愛情から仕事量は膨大なものだった。長年手をかけてこられた農作物を大切にするように、その作物を求める消費者の存在もとても大切にされていた。素人目に見ても美しいその農作物を出荷される際は、ご自分の手と目で厳選された個体を箱詰めされる。その後商品に傷が無いか等をダブルチェックされるほどのこだわりの下、その仕事ぶりはおそろしく丁寧である。ゆえに消費者からの信頼は非常に厚く、農業経営の規模は縮小されるも農家 C の商品のリピーターは多い。商品が間に合わないことも多くなってきたと話す。しかし「なるべく、ずっと商品を購入し、美味しいと言ってくれる消費者の人との元へ自分の作ったものを届けたい。」と語る。「自分が出来ることを、出来るまで、頑張るつもり。」と朗らかに話してくれた。

【農家 D、E】
10 代の頃からこの道の農業に携われてきた農家 D。配偶者である農家 E と共に二人三脚で農業を営まれていた。「自分たちが食べていけるだけの稼ぎがあれば、あとは自給自足で暮らしていける。」と穏やかに語られた。作物の育て方から販売までの農業の川上から川下まで他人に頼らず、全て自分たちでやっていこうと決め、取り組まれてきた。自給自足を実践されている姿勢からも伺えるように、すぐ隣にある自然の中で、その恵みを大切にしながら農業に取り組まれている様子がひしひしと伝わってきた。その環境から生産される農作物を求め、時期になると県内外から顧客の足は絶えない。特に販売方法については、「人に頼らず、自分の能力や人の繋がりをいかし販売まで手掛けられる農家でないと、生き残っていくことは大変」と語り、独自の販売ルートの確立にご尽力された。農業のできる自然環境を大切にされつつ、実験的な新たな栽培にもチャレンジされている。新鮮さや面白みを忘れずに、常にご自分自身もわくわくされながら、消費者へ質の高いもの、新しいものを提供し続けられている。

【農家 F】
「自然林のなかですくすく育つ山菜たちがお手本。」と話す農家 F。多くの失敗も経験されながら、自然に近い農業の実践を長年続けてこられた。片品村の中でそのやり方を理解してくれる人が中々おらず苦労は絶えなかった。「1 人の生産者が 1,000 人の消費者を支えるのではなく、10 人の生産者が 100 人の消費者を支える、そんな農業の形で良いのだと思う。」と話してくれた。信念のあるやり方で農業を志す人が集まり、それを理解してくれる消費者へ安全な農作物を届ける、それが理想の形という。「この考え方を理解してくれる人はこの村にはずっといない。けれど、これが自分の一生の仕事だと信じられる。」と優しく語ってくれた。土のことを思い、多種多品目の作物を生産されている。「この野菜が欲しい、自然農を続ける思いに共感したと言ってくれる人へ作ったものを届けたい。」と力強くお話される。関東唯一の豪雪地帯という気候をいかした、伝統的な雪下での農作物の貯蓄方法も実践されている。雪下での保存は、安定した土中温度を活かした天然の冷蔵庫のようなものだ。昔から伝わってきた、合理的な方法を今に伝える農家の一人である。若い人で自然農に興味がある人がいれば、長年研究されてきたご自分の技術を伝えたいという思いを持たれている。

【農家 G】
農家 G は、人に恵まれて農業を続けてこられたと優しい表情で話してくれた。周りの人を大切にしながら農業に携わられてこられたことがその雰囲気からよく伝わってきた。長年農業を続けてきたが、約 30 年前に周囲の農家がまだ取り組み始めていない分野に手を出した。その際も、指導をしてくれる人の存在や助けてくれる人が周りにいたと、ご自分の頑張りや苦労のことは語らず、常に人への感謝を語られた農家 G。自分自身は夏は農業、冬はスキー産業に関わる仕事をなさっている。しかし通年農業ができたらという思いを持たれている。ただ村内において通年農業で仕事をやっていけない状況を問題視している人は少なく、気付いていない人が多数ではと危惧されている。農業経営自体は家族でこなされているが、近年は繁忙期には人を雇う余裕も出てきたと話される。もったいないと感じていた余剰の農作物を利用し、加工品の生産にも取り組まれる等、常に新しい可能性を模索しチャレンジされている。農業に興味を持つ若い世代を、個人だけでなく土地全体で後押しできるようになったらいいなと話してくれた。

【農家 H】

農家 A、B と同じく、農家への転身のきっかけは 2011 年の 3.11 だと話してくれた。先祖代々農業を営まれていた土地を継がれる形となった。家族経営にも難しい点が多いと多くの農家が語る中、「良い距離感を保ちながら、良いバランスで家族と農業を続けられている」とお話してくれた。家族だけでなく、農家同士の人間関係も非常に大切にされながら農業を実践されている。収穫過程で大量に廃棄されていく作物の問題について「もったいない、どうにかしなくてはならない課題」と話す。経営面ではデータ、具体的な数字をきちんと蓄積されながら、改善点や課題を洗い出し、翌年の農業経営にいかされる手法をとられていた。そうした知識を隠さず、ざっくばらんにお話してくださる大変気さくな農家だった。「農業は誰かに強要されてできる、続けられる仕事ではない。」と語る農家 H。若い世代にとって農業が素敵な、かっこいい仕事と映るようにしたいという思いから、新たなチャレンジにも取り組む。農家 G と同じく、農業が通年の仕事にならないことへの危機感を募らせている。冬季でも農業の仕事ができる環境を創出すべく、仲間と共に挑戦し続けられる姿は、これから農業を志したいという若者にとって大きな刺激、魅力になるだろう。

【農家 I】

農家 G、H と同様、農業が通年雇用の仕事にならないことを憂慮している農家 I 。長年、この課題の大きさを投げかけ続けている。家族以外に繁忙期には人を雇う。「人を雇用し、一緒に働く」ことを大切にされていて、「一緒に働いてくれる人たちが、年間、安心してここで仕事ができるような環境にしたい」と力強く話してくれた。課題の大きさを周囲に投げかけるだけでなく、冬の間もできる農業の仕事を生み出すだめ、様々な取組みをなさっている。「家族もいいが、家族に頼みにくいことでも他人と思えば頼めることもある。そして他人との信頼関係を築くことが大切。」と一緒に働く人の存在を本当に大切にされている様子が伝わってきた。農業の土づくりに対してもこだわられており、実践と勉強を続けられている。農家 F 同様、この土地特有の気候を活かした野菜の雪下栽培も実践されており、同じ作物でもより高い糖度の野菜を生産することが可能となっている。それらの野菜を使った加工品生産にも取り組まれ、地域独特の栽培方法を活かした農産品をより広く、多くの人に親しみを持ってもらえる工夫をなさっている。独自の販売方法も確立されており「売ることは頑張っている。」と笑顔でお話された。農業に関しては、数十年単位を見越し、指導、サポートすることが大事と考えられており、一度失敗したから終わりという姿勢ではなく、どんなに時間や努力を費やしてでも「出来た」という一つの成功例を作り、経験することが大切だと話をしてくれた。

おわりに

第 1 章、第 2 章を通して、片品村の既存農家が直面する農業の現状と課題を見てきた。農業従事者の減少に今すぐ歯止めをかけることが困難であること、耕作放棄地を減らすことが難しいことは各データからも容易に読み取ることができた。これらの問題は、その課題に直面している当事者だけでなく、農業を産業の一つと考える者全てが一体となって取り組まなければ、解決することは不可能に近いと考える。

しかし、農家一人一人から話を聞く機会を得た今回の調査で、ネガティブに思えるような課題に対して、懸命に解決の道を探り、一歩ずつ出来ることに取り組み始めている農家の存在を知ることができた。これは「問題ばかりで大変・・・」という農業のイメージを大きくプラスに転じさせる事実である。減少していく農業就業者数や増加していく耕作放棄地数、高齢化していく農家数ばかりに目を奪われていては気づけないことを、いつも現場で土と作物と向き合っている農家は気づき、危惧し、できることをスタートしている。

多くの職業において、「3K」と呼称されるものがある。農業における 3K は、「汚い、きつい、危険」などのネガティブなイメージがまかり通ってきた。しかし近年、新たな 3K として、「稼ぐ、効率化、簡略化」などポジティブで、人々に将来が広がる可能性を感じさせる言葉が並ぶようになってきた。片品村の農家も、ネガティブと捉えられる課題をポジティブなイメージへ変化させていく可能性を大きく秘めた取組みに着手し始めている。農業のイメージを豊かで魅力的なものに変えていく力を持つのは、全国各地、都市や地方の垣根を越えた、個々の農家の存在であるのだ。

自然を相手にした職業であるという根底は変わらないため、常に農作物と向き合うことが優先される。しかし、生産する作物の選び方や栽培方法次第では、仕事とプライベート、家族との時間、双方を大切にできるワークライフバランスを実現しやすい職業だ。農業学校の存在や企業が運営する農業専門のスクール、書籍やインターネットで得られる膨大な情報など、自分のスキルを高めるための手段も多種多様である。自分のライフスタイルに合わせ、いかようにも新しい取組みを実践でき成果を生み出すことができるのだ。ただし前述したように、農家は一人一人個人で考え、実践に移していく機会が多い。常に課題を見つけ、それを修正、解決していく能力が必要とされるが、裏を返せば、常に新しい挑戦に取り組むことができるということである。自分の能力を最大限活用し、仕事にチャレンジしたいという人にとって、大変面白く魅力的な仕事といえるのではないだろうか。

現代の既存の企業社会の中では、まだまだ「自分の能力を最大限活かした仕事に就く、新しい試みを歓迎する」という潮流は主流とはなっていないのだろう。しかし、農業は若い人、高齢の人問わず、挑戦し新しい取組みを実現したいという意欲さえあればスタートすることのできる、平等に門戸の開かれた職業だ。国や自治体等の技術的、経済的支援のオプションも充実している。

「人間の生きる糧となる食物」を生産することのできる必要不可欠な仕事。農業。それを支える一人一人の農家の存在に改めて感謝の念を感じたこの調査を通し、農業という仕事に対する考え方、向き合い方が様々で、上述のようにバラエティに富んだ、魅力的なものであることを再認識することができた。

まずは本調査が、農業に携わる人々、興味のある人々、特に若い世代へ、そして行政関係者へ届くよう発信することを第一歩としたい。そして農業という仕事の魅力を社会に広く認知できるよう働きかけ、農業に携わる人々が生み出す新たな挑戦や価値観をサポートしていける体制を整備していきたい。

謝辞

本調査でお話を伺わせて下さった 9 名の農家の皆さま、文字では十分に言い表すことができませんが、感謝の気持ちをお伝えさせて下さい。本当に貴重な機会を与えて頂き、ありがとうございました。この場でお一人お一人のお名前を出させて頂き、謝辞を申し上げたいところですが、ぐっと気持ちを抑えております。

不思議なご縁によって、皆さまと出会い、お話を伺えたことは私の財産となりました。本調査報告書には載せきることが出来なかったお話もたくさんあり、力不足を恥じております。たくさんの大切なお話、将来への課題提起も、今後 NPO 法人武尊根 BASE が農業分野の支援体制を整えていくための糧とさせて頂きます。

引き続きご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

参考資料

－2015 年農林業センサス
－群馬県の年齢別人口　平成 30 年年齢別人口統計調査結果
－平成 17 年度国勢調査　就業状態等基本集計結果
－平成 22 年度国勢調査　就業状態等基本集計結果
－平成 27 年度国勢調査　就業状態等基本集計結果
－尾瀬の郷片品村人口ビジョン